

Title	ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』(第十九～二十三章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt, Madame Gervaisais (chapitres XIX-XXIII), (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.80 (2025. 3) ,p.175 (10)- 184 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20250331-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』

(第十九～二十三章) (翻訳)

山 本 武 男

訳者まえがき

十九世紀フランスの文豪ゴンクール兄弟が、共同で執筆した最後の小説『ジェルヴェゼ夫人』は宗教小説である。ヒロインのパリの上流階級の婦人は、発達障害を持つ幼い息子と共に、故あってローマに来て、滞在する。夫人は病気がちであり、読書好き、且つ内向的である。キリスト教に関しては、カトリックに帰依しつつも、独自の感覚の持ち主であり、ローマの宗教行列に批判的な視線を注いでみたり、フランスとイタリアのカトリックの教会建築を比較して、前者の石材より後者の大理石を好んだり、批判精神に富んでいる。二十三章では、サン・ピエトロ大聖堂での枝の主日の式典の描写が詳細を極め、ヒロインが身を置いている空間が、臨場感を以て伝わって来る。

十九

サン・ピエトロ大聖堂には、絢爛豪華な死神の出入り口がある。それは黒大理石で出来た柱廊で、その上には、重たそうな帷しほりを持ち上げる黄金の骸骨の、斜めに舞い上げられた両脛すねの骨が、飛び上がっており、頭蓋骨の上に垂れ下がっている、その重量感のある幔幕まんまくは、黄金の指の骨の先で「永遠の時」の砂時計を、通行人の上で、宙にまっすぐ立てている「長逝ちようせい」の面差しおもざを見えなくしていた。昼下がりの様々な教会を探訪して行つた中うちの或る回の事、ジェルヴェゼ夫人が大聖堂の聖具室のあの出入り口から出て来た時、サン・ピエトロ大聖堂内の数ある小聖堂のうち、未だ一度も視線を捉えた事のなかったと或る小聖堂が、彼女の前に現れ出た。そこにあつた十三の告解場の前で、彼女は無意識に歩を止めたが、それらはカトリック世界の全言語に対応した、キリスト教徒の告白の秘跡の耳と口の観があり、それらの切妻には次の様なラテン語の文字が刻まれていた。

スペイン語用

ポルトガル語用

英語用

ポーランド語用

イリユリア語用

フラマン語用

ドイツ語用

イタリア語用

故知らず、惹き付けられて、世界を包括するこのラテン語を、たどたどしく読み続けていたが、その時、ドレスを引っぱられて彼女は息子の方を振り向いた。すると子供は彼女に、祭壇の天蓋の上方、煌めく穹窿の青みがかった光の中に、「ペテロ、そしてこの石の上に我、築き上げん……」の黄金の文句を指し示していたが、それらのラテン語は、^{クボール}天蓋の蛇腹層の上に、今まさに、火で書かれた許りの文字の様に見えていた。

二十

秋の訪れと共に、彼女の健康面に見られた改善に伴い、ジェルヴェゼ夫人は、自身の狭くて、孤独で、殆ど閉じ籠った生活から、より幅のある、より広がりのある、外界へと戻りゆく生活に移行した。

彼女は月極で馬車を借り、住み込みで、料理もし、何時も変わらぬ色物シャツの上に黒い服を着て、馬車の後部に乗入り込む、イタリアでよく見る種類の男の使用人を一人、雇い入れた。そうして訪問を開始し、彼女は、自身の推薦状をリヴェラーニ公爵夫人の元へ届けた。

ある時期、彼女はより大きな住居を探そうと考えていた事があった。が、彼女は、貧窮に耐えつつ、祖先から受け継いだ板張りのローマの古地図にあるのと同じ場所で生計を維持している、あの正直な家主たち^{パドローネ}に向けての同情の籠った関心も相俟って、その思いをやや抑えていた。それにまた、一日中、小さな部屋の薄暗がり^{しじま}と静寂の中で、大人しい犬を飼い、時計の刻む音を聞き、幾つかの硝子の瓶に生けたブーケを眺めて、老いた叔母を訪ねようと思ひ立つた矢先、時として、お誂え向きの一寸した事が起こってそれを邪魔する、といった平凡で穏や

かな幸福を味わつて生きているこの家主の母娘に、彼女が病んだ際、それで初めて訪ねて来た類の女性たちとの関係と同程度の、然し別物の、ささやかな隣人関係を見出したのではなかったか。

二十一

ジェルヴェゼ夫人は、幾度も、リヴェラーニ公爵夫人の家の、珍奇ながらも魅惑的な食事が供される晩餐に呼ばれた。

一年中、何時行つても其処にあるのは、花々の褥を思わせる、復活祭の一週間用の心地よい散らし模様のテールクロス。ワインの硝子瓶は一本も見当たらないが、家族の輝かしい美術品たる、大きな水晶の器があり、そこには海の女神の勝利が彫刻されており、会食者たちはそれを、手から手へと受け渡した。料理の皿の間に、家に古くから伝わる冊子が見え隠れしており、そこには、料理人が何代も前から毎日、昼食や夕食の献立を書き込み、余白は、メモや、日付や、家族の出来事、その時々思いなどで埋まつており、更にそこには、短期滞在の客たちが、興に乗つて描いた、意見、カリカチュア、デッサン等が付け加えられていた。この様なテーブルに、公爵夫人の声が加わる。それは歌であり、独特な弁舌、笑い声である。彼女は、イタリア人女性らしく、ジェルヴェゼ夫人の息子の美男子である事に反応し、身分の高い人にありがちな鷹揚さで、何時も彼を隣に坐らせていた。子供の無言症は彼女には気にならなかった。子供を眺めて、楽しんで居たからである。

晩餐後には、公爵夫人は、小さい細長い部屋で過ごしたものであったが、その壁面には、柱頭にアカンサスの葉飾りが施され、断片的に鏡が嵌め込まれた付け柱が数本あり、黄金色の網が掛かった青色の扉があり、床には紫と黄色の小石を敷き詰めた小さな石畳が見られた。開かれた二つの窓を通して空気の循環のある涼しい部屋か

らは、実に沢山の花々がふさふさと咲き誇る薔薇の木々をドーム状に刈り揃えたものが、一つ見えていた。そこで、彼女は胴を伸ばし、肩を落とす、首を長くする麗しの姿勢に疲れつつも、やや上の空になり乍ら、顔には微笑のみと云った表情を浮かべて、信仰、希望、愛の、対神徳がタピスリーで表現された椅子に坐った小さな集まりで交わされている、途切れ途切れのお喋りを聞き流していた。話し声が途絶えた。会話に休息の間が訪れ、シャーベットを賞味している様にも感じられた。そうしてそう云った、時を手放し、それが流れゆく音に耳を傾けて愉しむかの様なイタリア人のサロンらしい沈黙が、度々繰り返された。

その親密さを妬む部外者に対しては、ローマの上級貴族風に閉ざされているこの室内には、晩に訪れて来る者は稀だった。参会者全員、それこそがこの土地柄を見事に表わす人々で、ローマの親戚縁者の幾人かの公爵たち、ダ・ヴィンチが描いたヘロデアを思わせるほっそりした顔立ちの若い従妹たち、そして家に出入りしている二人の枢機卿はと言えば、赤と金の飾り紐の付いた彼らの帽子を小脇に抱えて、十八世紀の伊達男よろしく軽妙に入室してくる様が見られた。二人は自分の指定席たる、何時もの肘掛け椅子に着席して、ぐっと公爵夫人の耳元に近付くと、神父や外交官がよくやる言葉、あの最後まで言い切らない気取った文句を口にし、最後は顔付き、表情による演技、時にはローマの高位聖職者たちの眼に独特の、あの不可解さ漂う視線で締め括るのであった。そうして聴^{やが}て、彼らの帽子で、一瞬、自分たちの緋色の膨^{やぐ}ら^{はき}をぽんと打つと、二人の枢機卿は、立ち上がり、挨拶し、去って行くのであった。

二十二

冬になった。ジェルヴェゼ夫人の健康は、リヴェラーニ公爵夫人のサロンに熱心に通う為には十分に良好であ

り続け、目下評判の二三のローマの貴夫人のサロンも掛け持ち出来る様になり、ピンチョの丘のテラスに小型四輪馬車を停車すれば、すぐに言い寄る男達の取り巻きが出来程であった。

彼女は大使館の晩餐会やヴィラ・メデイチでの歓迎会レキプシヨのほほ常連と言える存在になっていたが、そこではその年、夜の音楽会が幾つも催され、才能ある若者たちが、早くも将来、有名な作曲家になるのだらうと期待を抱かせていた。

彼女は屢々ピエール・シャルルを、彼が非常に喜ぶので、そこへと、またローマのオペラ座や、アポロ劇場へと連れて行ったものであった。そしてイル・サンティッシモ・カルネヴァレ聖・謝・肉・祭、即ちカーニヴァルの季節ともなると、彼女は三日間、コルス通りの歓喜の只中で、フランス衛兵隊の小さな制服を着込んだ愛くるしい子供を散歩に連れ出したものであったが、投げ付け合われる紙吹雪に少々面食らった様子ではあるものの、最終日の晩には、その遊び心に火が付き、「燃え残り無しセンツァ・モッコロ 燃え残り無し！」と勝ち誇った大きな声を出し乍ら、皆は各々の為、また各々は皆の為に蠟燭の先に息を吹き掛ける中、彼もまた、小さな蠟燭モッコレットの火を消すのに躍起になったのだった。

二十三

前の年は、フランスから着いた許りで、疲れが酷く、また甚く衰弱していた為、ジェルヴェゼ夫人はサン・ピエトロ大聖堂で行われる復活祭パスクの祭祀に参列する事は叶わなかった。がその年は、ローマで過ごす二回目の聖週間ステイサントに、彼女はそれが如何なるものか知り度くなった。

枝の主日の日曜日の日、彼女は、黒のワンピースに銀色のマーガレットで留めた黒いヴェール姿と儀礼に適った服装で、内陣の左右に居並ぶ婦人たちの為に段々に組み立てられたあの大きな回廊席のうちの一つに居た。彼

女の視線は、眼前に進み、矛槍の鉄製部分、兜、その頂上部の金の飾冠、白い長毛の羽飾りへと移ろった。総大司教、貴顕たちの列の頭部から下には、金糸で織り成された上祭服カズラが見え、また法衣が、その尾に当たる部分が波状になり、贅沢な迄に打ち寄せ、殆ど覆い尽くす様に床に垂れている。座して縦列をなす枢機卿の頭の後ろには、その足の傍に坐って控える裳裾持ち達がいる。一樣な服装の大使たちや外交官らの頭の向こうには、陸軍の閲兵式の際の軍装の幕僚、また王子たちや王ら、屢々袖擦れ合わせて交わり合う、あのヨーロッパの著名な出席者らが控えていた。それから彼女の視線は、内陣に一番奥で、地味な赤色を身に纏った教皇へと行き着いた。

大聖堂は敬虔にして冷たい、瞑想するに相応しい日の光、三月の日の光に照らされているが、陽光は入口の聖堂の扉に強く差し、そこで留められている故に、精霊サン・テスプリの黄色い光背と、サン・ピエトロ大聖堂の説教壇のステンドグラスの中の放射状の光の矢を持つその外縁は、未だ照らされていなかった。ミサ並びに、教皇の真紅の喪服を含むこの日曜日の半喪服を包み込む巨大な幔幕まんまくの紫色で薄く色付く、陰気な日の光。

サン・ピエトロ大聖堂の巨大空間は静まり返っていた。そこで聞こえるものと言えは、大勢の人の足音のみで、それらはつるつるした大理石の床の上で、大噴水がそこに流れ出たらするであろう様なばちやばちやした音だった。突如、神の御前みまへに来たユダヤ地方の息子たちを記念する讚美歌「ヘブライ人の息子たち」が鳴り響き、飛翔し、若い喜びの雅歌、ホサナ聖歌が冴えた音で空気を引き裂き、上昇し、そして丸天井の高い所で消えたかと思うと、その高さの遠い所で、山のこだまの子供の声の様に轟くのだった。

この聖歌とその歓喜の最初の盛り上がり具合にして、行進が始まり、ローマ・カトリック教会のここに居る全ての信者らの、延々と続き、変わらない行為の繰り返しの様な列は、教皇の手から小枝を受け取りに向かつて行っていた。枢機卿たち、総大司教たち、大司教たち、司教たち、司教補佐たち、司教冠を被る資格のある大修道院長たち、特別聴罪司祭たち、ローマ守備司令官、教皇庁会計院監査官、教皇使用人頭、財務官、実務に就い

ている、或いは名誉職の使徒座書記官たち、ローマ教皇庁尚書部理事、異端文書審問官、修道会総会長たち、四人の学芸員、ローマ聖回転法院判事たち、教皇庁会計院付き高位司式聖職者たち、教皇庁大審院選挙人たち、教皇書簡作成係たち、式部官たち、侍従補佐たち、財政官たち、侍従たち、上級侍従たち、教皇主宰枢機卿会議弁護人たち、盾持ちたち、聖歌隊員たち、教会合唱隊の聖職者たちと侍者たち、木母ウィルガムベアの小枝を捧げ持つ者たち、——あらゆる種類の教会関係者の群、並びに数えきれないほど大人数の「ローマ教皇のお身内」一同が、そのゆるゆるとした行進を延々と連ねており、その様は、天国で選ばれし人々が棕櫚の葉を摘みに行くと云うあのキリスト教の天の軍団の連なりはこういうものではないかと思わせるものであった。

座したる教皇は、仰ぎ来たる接吻に、刺繍の施された布に覆われた自身の膝を、自身の手を、そして自身の足を差し出し、各々の者に、威厳ある無意識的動作で、サン・レモの皺の寄った棕櫚の葉を配っていたが、その儀式に、且つ古式に則った身振りは、教皇の椅子の天蓋の下が香で煙っている事もあり、古の聖像いにしへのの様に見えていた。

見事なる演出、典礼の感嘆すべきどんでん返し、十六世紀の宗教的勝利の演出の傑作、それはそのカトリック芸術の天才によるもの、その芸術家、画家たちのあの偉大なる手腕の賜物であり、彼らは人々の居場所の設置の構想、配列、配置、構成そして左右対称を、また生きた美しき舞台装置たる人間が群れて織り成すピラミッド型構造を編み出し、アーミンの帯を締めた短いマント姿の、またはレースの膝丈スルの祭服姿プリのこれら全ての壮麗な端役を段状に置き、彼らはプロケードや絹で輝き、手にした自らの薄い金色の棕櫚の葉を、巨大なティツイアーノの絵の鈍い調和と光輝を背に、つまりは真紅を背景にして、小刻みに揺らしていた。

ジェルヴェゼ夫人は、これらの式典の中での、注意を集中する事から来る疲労した感覚が、長時間経つうちに倦怠を覚えて生ずる、あのぼんやりとして、少々虚弱の所為で動揺した状態に立ち至っていた。彼女の瞑想が広

がり彷徨^{さまよ}っていると、突然彼女はある音に揺り動かされ、目覚めさせられたが、それは嘗て耳にした覚えがない種類のもので、世界の終りの呻きが込められた嘆き声の様であり、独自の知られていない音楽で、そこには怒り狂う賤民の侮辱の言葉、歴史の彼方^{かなた}から聞こえる言葉のゆつくりとして荘嚴^{レチタイン}な叙唱、限りなく魂の奥底に触れて来る旋律^{バス・タ・ユ}を奏するバス等が混ざっていた。

それは、三人の助祭によつて歌われる、聖マタイの福音書によるキリストの受難を劇的に表現した単旋律^{カントゥス・フラーニス}聖歌であつた。

後頭部に僅かな小刻みの震えを覚えつつ、神経的に幻惑されて、ジェルヴェゼ夫人は物憂げに心痛めた状態の儘になつていたが、その上を憂鬱な音階を揺り動かすそのバスの低い音が、無限の深い悲しみを表す広がりのある囁きの様なそれらの音色を充滿させ、それらは苦痛を語る音節に乗つて数分間ずっと高みにあつて振動しており、その音波はその後ろも消えずに空中に留まり続けていた。そして更にバスが、彼の喉の無声だつたり濁り声だつたりの中で、「神人」の断末魔の、「犠牲^{いけにえ}」の嘆き声を、人間の音色で以て、抑揚を付けたり、遣る瀬無く歌つたりしつゝ、上げたり、下げたり、また上げたりしていた。

あらゆる神の加護の担い手の死が響き渡るこの歌の間は、ローマ・カトリック教会は恩寵^{グロリア}を求めぬ。世界の真の光の闇を告げるこの歌の間は、ローマ・カトリック教会は大蠟燭に火を点さぬ、香を炊かぬ、神^{グロリア}よ、榮光^{ティビドミネ}は御許に、とは応えぬ。

ジェルヴェゼ夫人は、絶えずバスに耳を澄ましていたが、バスは死に瀕して一層心に沁みるものとなり、一層苦しげにもなつて、「我が魂は死に至るほど悲しみに沈んでしまつたと感じている」と言うイエスの声の様だつた。それはイエスの声そのものであり、一瞬、聖歌隊員の唇の下から、気が遠くなりゆく神の慄^{おの}きを、人々の胸に行き渡らせた！

更に叙唱^{レチタティヴ}は続くも、聖歌隊の有頂天の繰り返しによって途切れ、その騒然たる嵐そのものの様な叫び声、人殺しの民衆の滑稽乍ら残忍な、戯画的な騒ぎ声、正義の血を要求する群衆の不調和で冒瀆的な言葉を吐く喜び、^{はりつけ}「磔にしろ!」、「バラバ!」と云った言葉を伴う甲高い突然の大声などは、忍従し、歯牙も掛けぬものの、苦し気なバスの声によって圧倒されて行くのであった。

翻訳は、以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais*, Gallimard, coll. Folio, 1982, p. 114-122.